

FD NAGASAKI JUNSHIN CATHOLIC UNIVERSITY Newsletter

第5号

長崎純心大学 教育開発委員会

発行日 2017(平成29)年1月1日

〒852-8558 長崎市三ツ山町235番地 TEL095-846-0084 FAX095-849-1894

目次:

認証評価で求められていること 2

大学・学生と地域の連携
【第2報】

グローバル化に対応した教
育の模索【第4報】

さらなる授業の充実に向けて 4

授業紹介 5-6

大学教育学会第38回大会およ
び第5回大学情報・機関調査
研究集会に参加して

2015(平成27)年度教職員 8
FD研修会概要

2016(平成28)年度SD委員会 9
活動報告

教育開発推進室の紹介

教育開発委員会活動報告 10

編集後記

高大連携とFDとSD活動 並びにIRに関して思うこと

学部長補佐 潮谷有二(現代福祉学科教授)



2016(平成28)年度より学部長補佐を拝命し、身の引き締まる思
いで日々の業務に取り組んでいる。とりわけ、2016(平成28)年度に取り組んだ下記
3点については、少子化に伴って本学が直面する厳しい状況を打破する一助になるも
のであると確信している。

- ① 社会保障制度を取り巻く状況の変化に加え、将来の地域包括ケアを担う専門人材
を育成するために、2013(平成25)年度より文部科学省の補助金を受けて始まっ
た長崎大学医学部と本学との連携事業による実績を踏まえて、現在の「現代福祉
学科」の名称を2017(平成29)年度から「地域包括支援学科」へと変更すること。
- ② 2016(平成28)年度のセンター入試より「地方創生特待制度」を創設したこと。
- ③ 田上長崎市長をシンポジストに迎えて「長崎の創生と大学の役割」と題するシン
ポジウムを本年7月2日に開催したこと。

加えて、学長の強いリーダーシップと学部長の指示のもと、学科名称の変更や地方
創生特待制度に関して純心女子高等学校の先生方と累次にわたって論議したことを通
して、本学教員や学生が、純心女子高等学校の先生方や生徒たちに直接話をする機会
が確実に増えてきているということを本年度の成果の一つとして記しておきたい。

周知の通り、昨年度は学園設立80周年という記念すべき年であった。しかし、来た
る90周年、100周年という節目の年を、同窓生をはじめとする本学関係者が誇りを持っ
て迎えるためには、少子高齢社会と人口減少が同時に進行するという諸外国に類をみ
ない我が国の社会経済状況下にあつて、本学創立の理念と歴史を基盤に据えた上で、
教職員一同が本学の現状と課題とを客観的に認識し、普遍的なものと変革が必要な
ものとを理性的に峻別し、本学及び学園の将来を構想し、実現していく必要がある。

そのような観点からも、本学のSDとFD及びIRが果たすべき役割は大きく、本
学の教職員が一体となって、高大連携とともにそれらの活動を積極的に展開しながら
将来にわたって、本学の学生、ひいては純心女子学園に学ぶ全ての生徒たちの豊かな
成長と教育に寄与し、そのことが従前にも増して広く社会において確実に認識され
ることが肝要である。そのためにも、本学の高大連携、SD、FD、IRのそれぞれの活
動が他人事ではなく、関係者自らの当事者意識に基づく開発的な活動として機能し、
相互に連動しながら発展していくことが本学の将来に向けて極めて重要であるとい
うことを最後に指摘しておきたい。



公益財団法人大学基準協会
大学評価適合認証



認証評価で求められていること

—「内部質保証」という大きな課題—

坂本 雅彦（児童保育学科教授）

認証評価機関である公益財団法人大学基準協会より本学が2011（平成23）年に受けた「適合認定」の有効期間が、来年3月末をもって終わりを迎えるため、本学では目下、2017（平成29）年度の同協会による大学評価を受審する準備にかかっているところです。

大学基準協会は、各大学の質を評価する観点として「1. 理念・目的」「2. 教育研究組織」「3. 教員・教員組織」「4. 教育内容・方法・成果」「5. 学生の受け入れ」「6. 学生支援」「7. 教育研究等環境」「8. 社会連携・社会貢献」「9. 管理運営・財務」「10. 内部質保証」という大きな10の基準を設け、各基準について複数の「点検・評価項目」を指定することで、各大学が自主的に現状を点検・評価し、改善の努力を行っていく上での目安としています。認証評価を受審する大学に、まず、求められるのは、かくも多岐にわたる項目全てについて漏れなく点検を行うことであるわけですが、このたび本学が求められているのは、それ以上のことであるとも言えます。

近年、大学評価者としての基準協会が強調していること—それは、その大学に「内部質保証（Internal Quality Assurance）」のシステムが構築され、適切に機能しているかという点（上に挙げた10番目の基準に係ること）です。「内部質保証」とは同協会の定義によれば、「PDCA サイクル等の方法を適切に機能させることによって、質の向上を図り、教育・学習その他のサービスが一定水準にあることを大学自らの責任で説明・証明していく学内の恒常的・継続的プロセスのこと」です（大学基準協会『大学評価ハンドブック』2016（平成28）年4月発行、4頁）。

既刊のFD Newsletterでお伝えしたように、本学では教育研究の質の向上を目指し、学内各部署の努力によって多くの新しい取り組みが導入・展開されてきました。しかし、「内部質保証」の観点からすると、ただ“いろいろなことを、一生懸命やっている”だけでは全く十分でないのは明らかです。真に求められているのは、①“やっていること（取り組み）”の成果の検証 ②効果ありと検証されたことがそれきりで終わらず、恒常的に機能していく仕組みを確立すること ③“やっていること”の正当性を効果の面だけからでなく、大学の掲げる理念や方針（ポリシー）そのものとの内的な連関という面からも社会に対して説明・証明し、納得を得ること—この三つだということを「内部質保証」の語は語っているのです。

この非常に大きな課題を克服できるかは、個々の教員の自覚はもとより、まさに大学「経営（マネジメント）」の根本に触れる決断にかかってくるのかもしれません。



大学・学生と地域の連携



「フレッシュマン・セミナー A」での取り組み

石田 憲一（児童保育学科長）

「フレッシュマン・セミナー A」は、初年次教育として全学科1年生を対象とした基礎科目（卒業必修）です。この科目のねらいは、『知恵の道を歩み 人と世界に奉仕する』という本学建学の精神を理解しながら高等学校教育から大学教育への移行を円滑に進め、学生自身が心と体の健康を維持し、自らが生きる地域社会の課題の解決に向けて主体的に取り組もうとする姿勢を涵養することです。

特に重視していることは、学生が、フィールド・ワークで地域の課題について主体的に考えていくことです。15回の授業の中で約半数をこのために使います。このねらいのもと、長崎市の取り組みや将来に向けた課題について理解するため、昨年度に続き長崎市長田上富久氏よりご講演をいただきました。市長は、「当事者意識をもった人がたくさんいる町を目指すことの重要性」について語られ、学生も多くのことを感じ学んだ様子でした。

後日、①原爆資料館で被爆体験者の講話を聴き平和の継承について考えるグループ。②長崎歴史文化博物館及びサントドミンゴ教会跡地を訪問し長崎の歴史と今を知り教会に関係する遺産を世界遺産に登録する意義を考えるグループ。③三ツ山に伝わる浮立（江戸時代から行われるようになった舞）を知り、地域の伝統継承の重要性について考えるグループの3グループに分かれてフィールド・ワークを進めました。それぞれの班が、地域社会の課題、これからの自分達の役割について真剣に話し合いました。平和について考えた①グループは、被爆者から直接話を聞ける最後の世代として、注意深く被爆者の声に耳を傾けたいと話していました。長崎歴史文化博物館等を訪問した②グループは、キリスト教に関する歴史や教会など、長崎のすばらしさを自分達も初めて知ったので、他の人達にもこのすばらしさを知ってもらいたいと話していました。最後に浮立について学んだ③グループは、地域の文化を後世に継承する大切さを感じていました。

このような経験をした学生が、これから地域の課題に主体的に取り組む、よりよい地域社会を創っていくことを願っています。



浮立を体験している様子

第4報 グローバル化に対応した教育の模索

2015（平成27）年度のFD Newsletterでは、本学の国際交流をめぐって、ドイツのアイヒシュテット大学、スペインのアルカラ大学、韓国の大邱カトリック大学、メキシコ日本学院を紹介しました。今年度は続編として、ニュージーランドのマッセイ大学、韓国カトリック大学（ソウル）、韓国の大邱カトリック大学、北京外国語大学についてご紹介いたします。

滝澤 修身（比較文化学科教授）

マッセイ大学（ニュージーランド）への単位互換留学 畠山 均（英語情報学科長）

この留学プログラムは姉妹校であるマッセイ大学に6か月間（2年後期）留学し、ホームステイをしながら大学に通い、主として英語コミュニケーション力のスキルアップを目指しています。募集人員は3名ですが、毎年それを上回る5名から6名の応募があります。選考は書類審査（志望理由書、GPAで示された成績、TOEICのスコア、ケンブリッジ英語検定の成績など）、英語での面接、日本語での面接で実施されます。このプログラムはマッセイ大学のきめ細かい配慮により何のトラブルもなく10年以上継続しています。参加者は英語力の向上はもちろんですが、日本とは文化的に異なる現地で様々な体験をし、人間的に大きく成長して帰国しています。



韓国カトリック大学 椎葉 富美（比較文化学科教授）



比較文化学科では、韓国カトリック大学から1年間、特別聴講生の留学を受け入れています。留学中は、本学の学生（SA：スチューデントアシスタント）が講義や学生生活をサポートするだけでなく、教員の指導のもと「日本小研究」を執筆しています。2015（平成27）年度留学生文炫善さんは、「日本の建築の歴史と特徴—ミニマリズムと日本の建築」を執筆しました。

本学生には、妹校派遣留学制度（全学科対象：1年間）と単位互換留学制度（比較文化学科のみ：半年間）があり、韓国カトリック大学へ留学することができます。2016（平成28）年度は、比較文化学科の平野加奈さん（姉妹校派遣留学）が留学しています。また、2015（平成27）年度は、比較文化学科の薮遙菜さんと小林喜恵さんの2名が単位互換留学をしました。

大邱カトリック大学（韓国）への単位互換留学 畠山 均（英語情報学科長）

2014（平成26）年度から始まったこの留学プログラムは姉妹校である大邱カトリック大学に6か月間（3年前期）留学し、寮生活をしながら大学に通い、韓国語のコミュニケーション力向上だけでなく、英語の授業も履修し英語コミュニケーションのスキルアップも目指しています。2016（平成28）年度は2名の学生が留学しました。選考は書類審査（志望理由書、GPAで示された成績、本学で履修した韓国語の成績など）と日本語での面接で実施されます。大邱カトリック大学のきめ細かな配慮により何のトラブルもなく2年が経過した。参加者は韓国語と英語の向上はもちろんですが、地理的には近いが文化的には少し遠い韓国での様々な体験を通して、複眼的視点を身につけて帰国しています。



北京外国語大学 椎葉 富美（比較文化学科教授） 石井 望（比較文化学科准教授）

北京外国語大学は、全国でも1.2を争う高水準大学です。北京では中心部から離れた大学が多いのですが、北京外国語大学は中心部に近いことが大きな利点です。首都の現在の姿を良いことも悪いことも含めて、日々観察することができます。地下鉄を利用して外国人居留地区に行けば、日本の日用品も入手することができます。

比較文化学科では、北京外国語大学から短期留学生を1年間受け入れています。留学中は、本学の学生がサポートするだけでなく、教員の指導のもと「日本小研究」を執筆しています。2015（平成27）年度の留学生陳静怡さんは、「中古漢語における入声の考察—日本漢字音と閩南方言を手がかりに—」を執筆し、中国の大学に卒業論文として提出する予定です。

本学生には、姉妹校派遣留学制度（全学科対象：1年間）があり、北京外国語大学へ留学することができます。2011（平成23）年度には千綿世奈さんが留学をしました。

▶▶▶ さらなる授業の充実に向けて ◀◀◀

授業アンケートの改訂について

教育開発委員長 足立 耕平

2016（平成28）年度は原則として全ての科目で授業アンケートを実施することとなりました。全科目で授業アンケートを実施した場合、学生の立場では学期末の毎回の授業でアンケートに回答する必要があり、負担感が増加することが予想されます。このため、教育開発委員会ではアンケート用紙を改訂し、18項目あった設問を10項目程度に減らし、短時間で回答できるアンケートを作成することにしました。教員に加え、学生会・純心祭実行委員会の学生からも意見を聞き、委員会での議論を通して最終的に表に示す10項目となりました。少数の項目で授業改善に役立つ情報を得ることができる設問を作成することは非常に難しい課題でした。ここでは議論の過程で話題になったことを紹介します。



まず全体の方針として、「学生に聞かないとわからないこと」をたずねることにしました。例えば従来のアンケートでは「成績評価の基準が事前にはっきりと示されていた」という項目がありました。しかし、これは教員がシラバスに評価基準を明記しているかなどといった問題であり、学生に聞かずともわかることです。学生に聞かないとわからないことは、成績評価の基準が明確であると感じているか、公正に評価されていると感じているかということだと思われます。以上のような方針で設問内容を設定しているため、全体として、学生が授業に対してどのように感じているか、また、授業を通して自分の変化をどのように実感しているかをたずねる形式になっています。

次に、従来のアンケートでは「私は、私語・飲食・携帯電話の使用を慎み適切な態度で授業に出席をした」などの受講態度に関わる項目がありましたが、これらの項目は採用しませんでした。確かに学生の受講態度や意欲は授業アンケートの結果に影響するものと思われます。一方で、受講態度等に関わる項目があることで授業改善へ意識が向きにくくなるといった指摘や（三浦, 2012）、自省を促す質問をすると断定的な評価がぐだしにくくなり、「どちらでもない」に回答する傾向が強まることが指摘されています（http://www.dci.jp/service/enquete_04_05_05.php）。教育開発委員会でも非常に議論になった点ですが、設問内容の優先順位を考えた場合、授業そのものに対する設問を優先的に採用することにしました。なお、自由設定項目がありますので、学生の受講態度等についてはここで質問することが可能です。

その他、大学教育でのアクティブラーニングの必要性が高まっていることから能動的な学習の促しに関する項目を設定しました。また、学期末だけではなく学期途中での授業アンケートの実施を見据え、設問は過去形ではなく現在形に変更しています。

この授業アンケート自体も先生方や学生の評価を受け、今後さらなる見直しが必要になることでしょう。先生方には授業アンケートに対するアンケート（フィードバックアンケート）を実施しています。授業アンケートの実施方法や内容についてご意見をいただき、さらなる改善に向けて取り組んでいきます。

項目	番号	設 問 内 容
シラバス	1	授業の概要と目的がシラバスに明記されており、授業内容と一致している
評価	2	成績評価の基準が明確に示されており、学生の努力を公正に評価しようとする意図が感じられる
授業内容	3	この授業で扱われている内容について、それらを学ぶ意義が実感できている
授業方法	4	聞き取りやすい声や見やすい板書、教材の効果的な使用・提示などにより、授業内容がわかりやすく伝わっている
環境調整	5	教員は学習に適した環境を保つように努めている （私語・居眠り・学生の出入り・携帯電話への注意など）
能動的学習	6	教員は学生の積極的な参加（質問、発言、討論、練習、作業など）を促している
難易度	7	授業内容や課題の難易度は、あなたの学習意欲を引き出すうえで適切である
成長の実感	8	授業により知識や技能が身につき、自分の成長を実感できる
総合評価	9	授業に満足し、後輩や友人に勧めたいと思う
自由設定	10	（この項目は教員から別途指示された場合のみマークしてください）

文献 三浦真琴（2012）. 進化する授業評価～リファインの試み関西大学高等教育研究, 3, 13-30.

授業紹介

カウンセリング論Ⅱ 生塩 詞子 (人間心理学科准教授)

今回、『学生による授業アンケート』で学生からよい評価を得たとのことで、授業内容や工夫している点、学生の反応などについて書かせて頂くことになりました。



対象となった授業は、2年次後期開講の「カウンセリング論Ⅱ」です。この授業は教員免許資格取得関連科目で、比較文化学科、現代福祉学科、英語情報学科の3学科開講の授業です。評価が高かった要因を自己分析すると、①非常に身近な題材を扱う授業内容であり、学んだことをそのまますぐに日常生活のコミュニケーションに活かせる内容が多かったこと、②前期に開講している「カウンセリング論Ⅰ」で理論的なことを学び、その続きである本講義ではその実習・演習的な体験学習がかなり盛り込まれていること、などが考えられます。

まず、授業内容をご紹介します。本講では「聴く技法」として“聴く”とはどういうことか、言語的メッセージだけではなく、いかに人が非言語的コミュニケーションを用いているか、座る位置や目線、態度などからどんなメッセージ（感情）を表現しているのか体験的に学び、それを“共感的に聴く”という姿勢に繋げていく“聴き方”について学びます。そして、2人1組で1人の実際に「困って相談に来る人＝クライアント」の役作りをし、その後クライアント役とセラピスト役のロールプレイを行ないます。実際にクライアントさんと接することはでき

ないため、困っている人がどういう状況にあるのかを“想像”することを通して、クライアント理解に繋げるようにしています。また、映画を通してカウンセリングや援助が必要な人たちについて触れる機会も設けています。後半は援助技法として様々な心理療法について、例えば、芸術療法については、実際にコラージュをしてもらうなど、理論と実践を交えて伝えています。

課題の工夫としては、目線の与える・受ける印象を考察する小課題は普段の生活の中から具体例を探してもらうことで、日常生活へ応用できるようにしています。また、アセスメント(事例理解)のレポートは提出日の1ヶ月以上前に提示して準備の時間を設けており、最終回には採点してコメントをつけたものを学生達に返却し、自分のレポートのどこがよかったのか、何が足りないかを確認してもらっています。私自身が学生時代に納得のいかない評価があったこと、そして、何が足りないかが分かることが一番大切だということを、先生方や先輩方に教えていただいたことから、評価基準を提示してテストやレポート返却をすることを心掛けています。

学生たちのレポートからは、カウンセリングに来る人たちが、そこまで特別ではないこと、セラピスト役を通して、学んだ“共感的な聴き方”を実践しようとする、いかに難しいかということ、どこまでつっこんでいいのかという不安などを感じつつも、コミュニケーションのあり方として日常に活かせる点を自ら見出し、今後活かしていきたいといった感想が寄せられています。

授業評価を通して考えていること 松本 俊穂 (児童保育学科教授)

多くの大学ではアクティブ・ラーニング等の授業改革が進められており、その一つに『学生による授業アンケート』があげられます。その目的は、学生の理解度や授業への要望を知るため、教師の自己点検のため、授業改善のためなどさまざまです。

ベネッセが2008（平成20）年から2012（平成24）年に「大学生の学習・生活実態調査」を行った資料があります。そこでは、学生が満足感を得る授業とは何かを分析し、授業の満足度を高めるための三大条件が記されていました。①「教員と授業時間内に交流できる授業」②「学生の意見や授業評価の結果を反映させた授業」③「学んでいる内容と将来について考えられる授業」というものです。これらの内容は授業の形式や流行に左右されない、いずれの時代にも共通する普遍的授業の姿のように感じました。

さて、私がこの度評価対象に当たった授業は、「子どもの音楽Ⅰ」という児童保育学科1年生を対象とした演習科目です。児童保育学科1年生がほぼ全員が受講します。総数が100名程になりますので、3クラスに分けて授業を行っています。授業の内容を一



言でいうと「つくって表現する」。授業形態はアクティブ・ラーニングそのものです。授業の性格上、否が応でも教師、学生同士、膝を交えて意見を交わすことになります。また学生自身の「表現」であるが故、学生の意見や発想が丸ごと反映され「表現」に繋がっていきます。

言うまでもなく学生の能動的な学習は、教師の語り掛け無くして始まることはありません。特に音楽表現では、心が動かずして何も始まらないのです。教師の語り掛けによって心が動く、語り掛ける言葉に対し、前のめりになって聴こうとする、内田樹はそういう前のめりの体勢を導き出す言葉が「届く言葉」であり、『「届く言葉」か「届かない言葉」かの差はコンテンツの正しさや強さ、美しさではなくアドレス（宛先）だ』*と述べていますが、大変興味深いことのように思います。

現実には学習しない学生、課題について考えようとしない学生が大変多くみられます。しかし、私が伝えようとするメッセージの内容がわからなくともせめて、『メッセージの宛て先はあなたです……。』と伝えられる授業を目指していきたいと考える毎日です。

*内田樹（2014）「街場の戦争論」ミシマ社

Investigation into Methods for Jeff MacPherson (英語情報学科講師)

Improving English Seminar

Over the course of the last six months, I have been investigating ways to make the English Seminar course more effective in meeting the needs of the learners, yet still meet the academic and departmental requirements of the English Department and Junshin University. This need has been realized through reflection on the progress of the course, measurement of learner grades and scores, and direct analysis of learner needs as discovered through a survey. This process has been undertaken according to current EFL research and methodology I have encountered on the Cambridge Delta (*Diploma of Teaching English as a Foreign Language*) post-graduate course.

Overall, some of the benefits of the English Seminar course have been that our students receive two English communication lessons each week, meaning that there is more chance for them to speak and use English with their classmates. Two lessons also provides more time to expand on skills: listening, reading, writing, and pronunciation.

Perhaps the greatest challenge faced by our students relates to the fact that their actual English level and communicative ability does not always match the academic and formal examination requirements that they are subjected to. For example, the academic nature of the TOEIC test is different to the communicative tasks the students practice. Most of the high-level, formal vocabulary they encounter is unnatural in daily, verbal communication—even for native speakers.

In order to discover the actual level of learners entering Eigo Joho, a level-test is conducted. 1st year students also sit the Cambridge KET examination which is more suited to their immediate and short-term needs. As a trial, I have surveyed one Seminar class with a Needs Analysis questionnaire. This data has helped me to understand the learners' actual immediate English needs along with their future English needs. From this information, I have created a diagnostic test to discover what student English competency in relation to immediate and future needs and goals. This data will help target specific weaknesses and interests, making the language being learned more meaningful.

By being flexible and taking direct learner needs into consideration, it will be easier to model an English communication course according to students' wants and needs. Planning the course in this manner, based on the results of current EFL research and best-practice is regarded as being highly positive for students and teachers. This will most likely improve motivation, increase communicative competence, and assist students with employment and life beyond university.



要約

English Seminar の授業方法改善の取り組み

私はここ数年、担当する English Seminar の授業改善に取り組んでいる。この授業は英語情報学科の必修科目で、1年次から3年次までの3年間継続的に開講されている英語情報学科の英語カリキュラムの中で中心的な役割を果たしている重要な科目である。英語の読む、書く、話す、聞くの4技能のスキルを総合的に発展させる事を目的としており、1年次には週3コマ、2年次には週2コマ、3年次は週1コマ開講されている。

この授業が直面している課題は様々あるが、最大の課題は学生の英語の能力に合った方法で4技能をどのように向上させていくかである。そのために入学当初に独自に開発したクラス分けテストを実施し、習熟度別のクラス編成をしている。さらに1年次の5月と11月にはケンブリッジ英語検定試験を実施し、学生の4技能向上の推移を客観的に把握し、学生のレベルに合ったベストな授業方法を常に模索している。

また私は学生の英語学習に関する意識と必要性を明確にするためのアンケートを考案し、それを実施し、学生の英語学習の必要性和将来の希望などを調査している。それによって分かった事の一つは、学生はTOEICのスコア向上を就職活動の準備として必要性を感じてはいるが、English Seminarの授業目標は4技能を基礎とする総合的なコミュニケーション能力の向上であるのでTOEICのスコア向上には必ずしも直結していない点である。学生の将来の目標と授業活動が大きくかけ離れていては学生の授業への動機は低下する。授業の内容と方法を学生のニーズとどのように一致させていくかもこの授業が直面する課題である。

要約：畠山 均 英語情報学科長

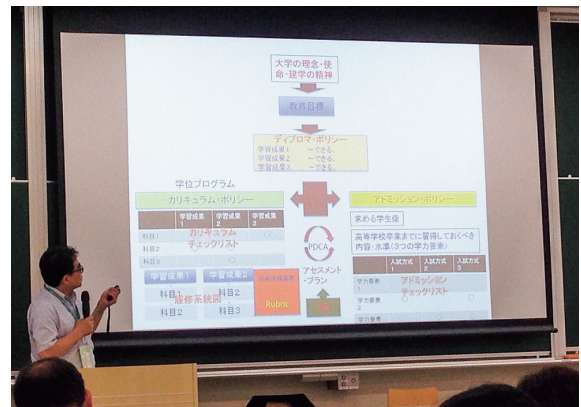
大学教育学会第38回大会および 第5回大学情報・機関調査研究集会に参加して

教育開発委員長 足立 耕平（人間心理学科准教授）

2016(平成28)年6月11～12日に立命館大学大いばらきキャンパスで開催された大学教育学会第38回大会および、2016(平成28)年7月12～13日に熊本市国際交流会館で開催された第5回大学情報・機関調査研究集会に参加しました。両者で共通して話題になっていたことが、ディプロマ・ポリシー（DP）、カリキュラム・ポリシー（CP）、アドミッション・ポリシー（AP）の3つのポリシーの一貫性、整合性についてでした。2016(平成28)年3月の学校教育法施行規則の一部改正や、同じく2016(平成28)年3月に中央教育審議会大学分科会大学教育部会より出された3つのポリシーに関するガイドラインにおいて、3ポリシーの一貫性や相互の整合性をはかることが求められています。

大学教育学会のラウンドテーブル『学生の「学び」を質保証する三つのポリシー+アセスメント・ポリシーについて考える』での関西国際大学学長の濱名篤氏の講演内容では以下の点が述べられていました。
1. ポリシー作成の基本となるのは学則（教育理念）である。
2. アセスメント可能なポリシーの作成を行う。
3. 3つのポリシーの作成手順としてはDP→CP→APの順に作成する。

大学情報・機関調査研究集会のワークショップ「大学評価とIR」（ファシリテーター、九州大学関口正司氏）では、ある仮想大学の学部の教育目的、DP、CPを見直し、相互に整合的になるよう改訂するというグループワークが行われました。用意された教育目的、DP、CPからポイントとなる点をポス

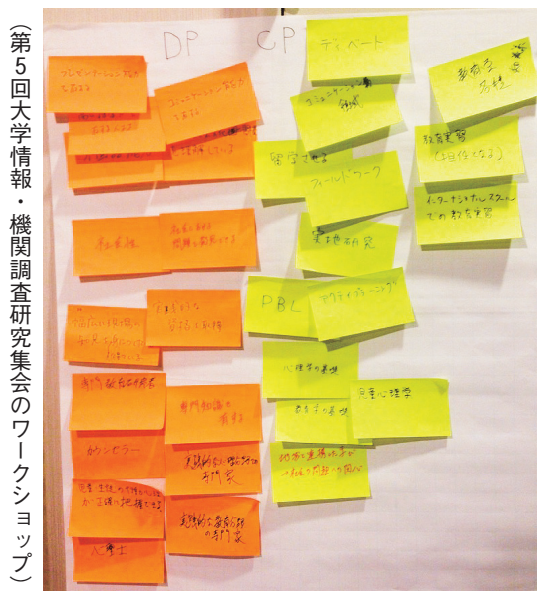


（大学教育学会第38回大会 濱名氏の講演の様子）

トイットに書き出し、新たなDP、CPとして模造紙にまとめていきました。さらに単年度計画を策定し、その計画達成指標（評価指標）と達成したことの根拠となるデータを考え、同様にまとめていきました。

以上のように、二つの学術集会においてポリシー相互の整合性ということが取り上げられていました。また、強調されていたもう一点は、ポリシーはそのアセスメントと一体的に考えるということです。例えばDPとして「ディスカッションの能力を身につける」を設定した場合、その力を育むカリキュラムを準備する必要があります。そして、学生のディスカッション能力を測定し、ねらい通りに成長しているかどうかを評価し、必要に応じカリキュラムを点検することが求められています。

教育開発委員会では学生の学修時間や自己の成長についての実感を問う学生生活調査アンケートを実施しています。このアンケートも学生の成長を測定する一つの指標として考えることができますが、今後はよりDPと関連づけた評価や解釈が必要となるでしょう。授業でも、その授業のねらいや目標（学生に何を学んでほしいか、どのような力を身につけて欲しいか）が定まって、評価の内容・方法（テストやレポートで何を問うか）が決まります。学生の評価に関わる教育開発委員会の立場からは、本学全体として今一度、どのような学生を育てたいのかという目標を共有し、その目標に沿った評価指標を各部署で検討していく必要があるように感じました。それぞれの学術集会の抄録集、資料を教育開発推進室に配架しています。学内の教職員の皆様はよろしければご覧ください。



（第5回大学情報・機関調査研究集会のワークショップ）

教職員(FD)研修会報告

—2015(平成27)年度 教職員FD研修会概要—

教育開発委員長 足立 耕平
(人間心理学科准教授)

2016(平成28)年3月14日(月)に2015(平成27)年度長崎純心大学教職員FD研修会を開催しました。本年度の研修会は「教育の内部質保証を考える」をテーマとして実施しました。

午前は九州大学大学評価情報室の高田英一先生より「内部質保証のあり方ー『内部質保証ハンドブック』を中心にー」との演題でご講演いただきました。全国の各大学において教育改善のためにどのような取り組みが実施されているのか、また、その取り組みはどの程度教育改善につながっているのかについて各大学へのアンケート結果をもとに詳細なご説明がありました。その後、本学、自己点検評価委員会の坂本雅彦委員長より「本学における取り組みの現状」について報告がなされました。本学においても授業アンケートや教員相互の授業参観、シラバスの点検など教育改善のための取り組みを多数実施しています。高田先生のご講演はより効果的な教育改善のための取り組みを考えるうえで、大変参考になりました。また、「大学独自の教育改善のストーリーの共有・実質化が内部質保証の実質化につながる」という提言が印象に残りました。今後は本学の教育理念である「知恵のみちを歩み 人と世界に奉仕する」に沿った教育改善を実行していく必要があると感じました。

午後は関西大学文学部総合人文学科の安藤輝次先生に「学生の学びを支援するルーブリック評価」との演題でご講演いただきました。ルーブリックは、ペーパーテストでは測定しにくいレポートや実技などの課題



を評価するための評価基準表を指します。グループワークをしながらルーブリックの作成の仕方やその効果について理解を深めることができました。また、ルーブリックを評価だけではなく学習の促進のために活かすという視点や、学生とともにルーブリックを作成し、それに基づき評価を行っていくという実施方法には大変感銘を受けました。今後、本学においてルーブリックを活用した教育実践が増加するのではないかと期待します。

【参加者の声(事後アンケートの自由記述より抜粋)】 (午前中のプログラムについて)

- ・内部質保証の運用の在り方に関する提言について、大学の教育改善のストーリーが教員・職員・学生も理解して動機づけられているかどうかについて、本学ではまだ足りないところがあると感じました。対外的(就職先など)からは純心の卒業生は質が良いと評価を頂くことが多いので、学生への学習動機づけとして啓発することも必要と思いました。
- ・既存の知識を再確認する良い機会となった。PDCAのためには、全体の目標設定とそれに基づく設計・管理が重要である事が分かった。小手先の評価では、ダメだということである。
- ・内部質保証について具体的にご教示いただき大変有意義であった。評価のための評価ではなく、それをいかに改善につなげるのか、また何のための改善かをきちんと開示しなければ絵にかいた餅にしかならないということで、本質的なご教示を受けた。しかし、言うは易く行うは難し、難しいことです。
- ・大規模大学と小規模大学とに分けた分析が大変参考になりました。ルーブリック、ポートフォリオは学内でも挙がっていた事項でした。
- ・大変参考になりました。シラバス点検を個人ではなく大学全体として検証することが重要であることが理解できました。
- ・わかりやすく整理されており現在の本学の状況(坂本先生の話)との関連性もとれました。

(午後のプログラムについて)

- ・やってみようと思った。ルーブリックをしっかりとさせるには学生の家での自習も大事だと思った。おもしろい講義だったと思います。役に立ちました。
- ・ルーブリックは質的評価をしていくときに非常に重要であることが分かったと同時に、評価は指導と一体化したものであるということを実感できました。ぜひ授業に活用していきたいと思います。
- ・大変刺激的な内容で授業改善に生かせる方法だと感じました。学生がさらに主体的に学ぶための実践を工夫していきたいと思います。
- ・これまで授業で教員の評価規準はあったが、学生を巻き込んでということは初めてだった。興味深かった。使える科目から始めたい。
- ・ルーブリック評価についての講義と演習で、内容と効果的評価を理解することができた。実践してみようと思う。
- ・評価基準。シンプルなことだが意味のあることだと思う。「指導と評価に活用する」ということに取り組んでみたい。
- ・グループ内で発表することで同じ内容でも表現の仕方が異なり楽しかった。授業の中で活かしてみたい。



2016(平成28)年度 SD 委員会活動報告

SD 委員長 **岩崎 由希子**
(図書館情報センター事務室長)



2016(平成28)年 8月30日(火)と 8月31日(水)に、SD 研修会を本学大会議室にて開催しました。

参加者は、大学間連携協定校である鹿児島純心女子大学から 5 名、純心中学校・純心女子高等学校から 2 名、純心幼稚園から 1 名の参加者と共に、1 日目 44 名、2 日目 57 名でした。

1 日目は、「大学教育の質向上について」と題し、大学改革、教育マネジメント、厚生補導等（クラブ活動・特別な対応が必要な学生へのキャリア支援）について、各担当部署からの発表後、本学人文学部の「大学の 3 つのポリシーについて」（ディプロマとカリキュラムとアドミSSIONのポリシー）のグループ討議を行いました。

2 日目は、「情報セキュリティ等について」と題し、まずは、本学の中長期計画と財務状況の報告を行い、後半、サイバー犯罪の脅威等について学外講師の講演を受け、学内情報を扱う職員の注意すべき行動について、グループ討議を行いました。

今回の研修では、職員の質向上を目的に、各職員が、大学の教育方針、学内の現状等を把握することで、同一情報を共有し共通認識を持つことができたのではないかと考えます。

さらに今後、長崎純心大学の職員として何ができるのかを各自が考える機会になればと思います。また、鹿児島純心女子大学の現状を聞く貴重な機会にもなりとても参考になりました。

その他の活動としては、語学研修の一環として、学内案内表示の英語表記を収集及び作成し学内の正式名称として共有できるよう準備を行っています。

参加者の声（事後アンケートより抜粋）

- ・大学職員として意識すべきことをこの機会に勉強できた。
- ・財務状況では、日々適切な予算執行を心がけたいと思った。
- ・日頃から当事者意識をもって業務を行わなければいけないと思った。
- ・様々な学生に対応する学内での組織づくりの重要性を感じた。
- ・他の課と必要な情報の共有化について、どのように行っていくのか検討が必要と感じた。
- ・一人一人の意識が変化するだけでも、大学教育の質向上に向かうと考えた。



教育開発推進室の紹介

濱田 洋子（人間心理学科教授）

J 棟 5 階の教育開発推進室は、会議室とライブラリーの機能を備えています。この部屋には、「今大学が直面している社会の変化とニーズに、どのように応えていくか」を考える時に、光となり、提言・政策を作成するための文献が詰まっている書棚があります。ジャーナル、学会誌、各種報告書、調査書、財政・政策の専門書、大学 IR、教育の質向上、教育方法論に関する書籍などが配架されています。

ジャーナルは、大学教育学会誌【大学教育学会発行】、IDE 大学協会誌【大学を中心とする高等教育の充実・発展に貢献することを目的とする任意団体、社会機関発行】、International Review of Education, UNESCO Institute for Education 【(UIE 編)】等。

各種報告書は、国内諸大学自己点検・評価報告書、授業評価報告、授業アンケート結果の考察、学生生活調査、国内大学・大学院の活動報告書、大学教育力向上報告書、各種プロジェクト報告書等が収められています。各大学の創立の理念に基づく教育の成果、努力、工夫が伝わってきます。

アドミニストレーションに関する書籍は、財政、政策、地域と大学、大学教育の再構築に関するテーマの書籍、大学評価、大学 IR、FD に関する資料。先駆けて実施している大学の情報とデータは貴重であり、重要な参考資料です。

大学の教育改善に関するテーマの書籍：教養教育、国際化、情報化、大学の固有な使命に基づく実践の記録と研究に関する書籍。このあたりを見ると、大学の大学化、学力の低下が声高に言われ、一方、社会と学生のニーズに答え、教育の向上に努めてきた過ぎし 10 余年を思い出します。

次に紹介する書籍は、教育の質の向上、方法論に関する書籍です。ここには、カリキュラム構築、新しい教育方法論に基づく理論、方法論、実践の記録などが含まれる。特に、ルーブリック、アクティブ・ラーニングに関する理論と実践に関する書籍が興味深い。

その他学内の過去の調査、アンケートの分析結果も大切に保管されています。IR の基礎資料となります。

本学には教育専門書が 400 冊余り収集されていますが、そのうち 282 冊が教育開発推進室に収められています。皆様のご利用を待っています。



教育開発委員会活動報告

2015（平成27）年度

■教育開発・高大連携委員会

第8回 平成27年11月4日 第9回 平成27年12月9日
第10回 平成28年1月6日 第11回 平成28年2月3日

■学生による授業アンケート

後期 平成28年1月25日～2月8日
※教員へフィードバックアンケート実施

■高大連携プログラム「職業を知る講演会」

平成28年2月18日14:30～15:20
純心女子高等学校1年生対象

■教職員FD研修会

「教育の内部質保障を考える」
平成28年度3月14日 10:00～15:00
※教職員へフィードバックアンケート実施

2016（平成28）年度

■教育開発委員会

第1回 平成28年4月13日 第2回 平成28年5月18日
第3回 平成28年6月8日 第4回 平成28年7月13日
第5回 平成28年9月16日 第6回 平成28年10月5日

■学生による授業アンケート

前期 平成28年7月19日～7月29日
※質問項目の改定
※教員へのフィードバックアンケート実施
※集計結果の公開（ホームページ）

■出張等

※大学教育学会第38回大会
「伸びる大学の教育力ー成果を出せる大学にはどのような教育力が必要かー」
※第5回大学情報・機関調査研究集会(MJIR)

図書・雑誌案内

※これらの本は、教育開発推進室で閲覧できます。貸出しを希望される方は、図書館で手続を行ってください。

■定期購読雑誌等

「高等教育研究」
日本高等教育学科会編 玉川大学出版部発行
「IDE 現代の高等教育」 IDE 大学協会発行
「INTERNATIONAL REVIEW OF EDUCATION」
UNESCO INSTITUTE FOR LIFELONG LEARNING

■図書

- ・ディープ・アクティブラーニング
- ・21世紀型スキル：学びと評価の新たなカタチ
- ・大学教員のためのルーブリック評価入門
- ・大学講義の改革－BRD方式の提案
- ・「主体的学び」につなげる評価と学習方法－カナダで実践されるICEモデル
- ・アクティブラーニング（シリーズ 大学の教授法）
- ・プロジェクト学習の基本と手法－課題解決力と倫理的思考力が身につく
- ・内部質保証ハンドブック

編集後記

皆様の多大なるご協力のもと、FD Newsletter 第5号を発行することができました。この場をお借りしてご協力いただいた皆様にお礼申し上げます。第5号では、「さらなる授業の充実に向けて」という特集を組みました。今年度からの新たな試みとして、授業アンケート改訂版の実施、さらに授業アンケートで学生から評価の高かった先生方を表彰するという取り組みを行いました。今回の特集を通して、他学科に限らず、同じ学科の先生方がどのような授業を実施されているのか、どのような工夫をされているのかということを知る機会となりました。今号の契機として、今後も「知恵と奉仕」という本学のモットーを踏まえ、地域に貢献できる質の高い人材養成を育成するための取り組みの一助になればと思います。

吉本知江子（現代福祉学科 講師）

平成28年度 教育開発委員会

足立耕平（委員長） 濱田洋子 坂本雅彦 滝澤修身 VanderVeen FrankJullian 吉本知江子 細田美恵

長崎純心大学 教育開発委員会

〒852-8558 長崎市三ツ山町235番地 TEL095-846-0084 FAX095-849-1894 URL <http://www.n-junshin.ac.jp/univ/>